文が多方面に亙れるを以て仔細に之をみる時、各方面の研究上の暗示を得る事多く、やがてこれが機緣となつて今後新研究の續出すべきは火を賭るよりも明らかであると思ふ。いささか蕪辭をつらねて本書の紹介に代ふ。願くは江湖の諸士一本を左右に備へられん事を。(刀江書院發行。定價八圓)〔鷲淵〕

●小川博士還曆記念史學地理學論叢

我が京都帝國大學文學部地理學教室並びに理學部地質學鑛物學教室の創始者として多年學界に貢獻せられた小川琢治博士は昭和五年己巳、五月二十八日、還曆の壽を迎へられた。因て僚友門下生相集り、頌壽の賀會を開き贈るに銅鑄肖像と記念論文集とを以てしたが、論文集の編せらるるに當り、稿を屬する者、學界の權威を網羅する實に五十有五人、科は文・理を分ち、蒐錄部を殊にし各々巨製をなし、今や上梓發刊の運びに至る。

本書は卽ち文科系統の論文二十六篇を蒐集したもので四六倍判一千六十四頁の巨冊、卷頭に小川博士還曆の照影を揭げ、次に博士の著作表(單行本、論文、歐文著述目錄)を載せてゐる。

各論文の題目、筆者及び其內容を簡單に紹介すれば、「支那古代の稻米稻作考」(岡崎文夫)支那古代に於ける稻米の用途として飯用、薦新の儀用、飲用(酒)、羞食用等を擧げ、其稻作地域を論じ、西晉・北魏に於ける稻作の問題に及べるもの。「人文傳播に關する一考察」(喜田貞吉博士)過去に於ける文化傳播の遲延は必しも僻陬の地交通不便等の地理的原因のみに依り解釋す可きに非ず、古俗保存等の特殊事情にも起因することを京都、奧羽等の例を引いて立證してゐる。「古文尙書に關する一二の小研究」(神田喜一郎)經典釋文の序錄の解釋、宋の薛季宣が書古文訓に用ひた隷古定尙書の眞僞に關する考察。「讃岐の人口稠密なる原因の一部に就て」(寺田貞次)交通路の關係より文化の發達、殊に佛敎の弘通より民衆の指導的立場に在つた高僧の輩出、又地形の關係上より古來灌漑用溜池の發達等を擧げ、此等地人相關の理法より今日の人口稠密を將來せるものなりと結んでゐる。「公羊疏作者時代考」(狩野直喜博士)十三經注疏の中で、撰者

不明の公羊の疏に就き其作者の時代を追求したもので、此書は唐人の作には相違なからうとし、其内には六朝の舊疏の混入してゐる事は疑無いが、直にそれを以て書全部が唐以前の作と斷定する說は甚だ妥當を缺くと論じたもの。「戚璧考附瘞玦」(濱田耕作博士)大正十四年の秋殷虛發見と傳へらる大石磬と同時に京大の有に歸した一個の玉器を名附けて戚璧と言ひ、其の戚と璧との結合より生じた複合形式を明かにしたものである。「唐光啓元年書寫沙州・伊州地志殘卷に就いて」(羽田亨博士)宋の初期に閉鎖された鳴沙の石室から發掘せる沙州地方に關する地志の中、現に大英博物館の所藏に係る本書を寫眞し來れる筆者が、其原本の體裁を述べ、本文の轉寫を試み、其性質より本書に題するに篇首に揭ぐる名目を以てし、其重要なる特徵を指摘した。「唐代幽州薊城疆域攷附營州廻城攷」(那波利貞)「北京郊坰地圖」及び「實測北京內外城地圖」に準據して筆者が遺址の實地踏査と諸記錄の考覈に依り、唐代の幽州鎭城が前燕國の都薊城を踏襲したる點を明かにし、其疆域を決定したる一大勞作である。「元和航海記航路の研究」(藤田元春)京大圖書館の珍藏に係る長崎の人池田與右衞門入道好運の著「元和航海記」に載する長崎より天川への乘前、長崎より天川(實は安南)への乘前、天川より日本への乘前、シャムラウよりの乘前に就いて、諸種の地圖、海圖を以て、以上の航路を檢出し、地名を考證したもの。「元代奴隷考」(有高巖)奴隷發生の原因として犯罪、俘獲、拘刷、鬻賣、家生、投靠等を擧げ、奴隷の身分を說き、元代に於て、支那で奴婢使用の特に盛んであつたのは畢竟蒙古人が固有の蠻風を輸入し、色目人と共に各地に、跋扈跳梁して漢族を虐待し、社會の秩序大いに紊れ、法制の威力殆ど地に墜ちてゐたのに因ると言ふ。「考古學上より觀たる漢代文物の西漸」(梅原末治)南露、高加索地方に發見されたる鏡鑑及び玉璧の資料より漢代文物の西漸を究明せるもの。「露清關係の研究」(下田禮佐)清初から第十九世紀中葉に至る約二百年間の露清間の外交特に通商關係の研究で、露支の接觸、尼布楚條約、北京條約、恰克圖貿易、黑龍江貿易、廣東貿易を說き、當時に於ける貿易狀況を描寫し

てゐる。「近世に於ける耕地荒廢と小作問題」（牧野信之助）泉州堺に例を採り、堺の東郊と市街再造期に於ける農人町、農人町と出屋敷、堺廻り諸村の訴願と小作問題の發現、耕地荒廢と手餘り地の發現、小作人の耕地放棄と入百姓の失敗、手餘り地の續出と地主階級の困憊等を論じ、寛永鎖國以來幕末に至る間に起れる耕地荒廢に伴ふ地主對小作、地主對領主の關係を縷述し、複雜、深刻なる小作爭議を取扱つたもの。「先史學史の一節」（小牧實繁）ブーシエー・ド・ペルトの先史學史上に占むべき正當の位置、卽ち洪積期に人類の存在せる證據を學界に示した偉大なる努力と第十八世紀末葉に於けるフランス學士院の頑迷、英國學者に依り同氏の說が承認さる迄の經路を詳細に述べてゐる。「桂女の研究」（江馬務）桂女は桂の里に住した元秦氏に從つて移住せる歸化民の子孫及び韓土風俗に感染せる倭民族の子孫で、平安奠都後、此地が產所となり、里女は之に斡旋して神功皇后の故事を附會し、里人は陰陽卜算の業を營んだことが里女をして其業を受けしめ、之も里中の舊家にのみ其業が殘り、他は白拍子遊女に類する者すら生じ、後世は其名義を存するに止るに至つた。「伊賀に於ける聚落の研究」（村松繁樹）地形の概觀を述べ、聚落の歷史的發達、分布狀態、型態を說明し人口の分布を見、將來に對する考察を論じて動力源の涵養を旨とする荒撫地の植林等を求めた。「キルギス・ステップ地方の景觀」（宮川善造）シュルツ博士の「シベリヤ地誌」の一節「ステップの景觀」に依り、カスピ低地及びムゴヂヤル山地、トウルガイ臺地、キルギス褶曲丘地の三區に分類して其景觀の描出を試む。「「中原音韻」中の八思巴字にて寫されたる漢字音に就いて」（鷲淵一）事林廣記卷十所載「百家姓」、元朝諸聖旨類、及び居庸關刻文等に見ゆる八思巴字漢字音に關する研究。「我が南洋諸島に於ける氣候と着衣問題との關係を論ず」（內田寬一）着衣者の分布及び其衣服、着衣者の少き原因、歐米人の着衣宣傳と土人の反抗並びに其效果、裸體生活の意義と其將來等に就いて、筆者の實地踏査に基いて論じたもの。「萊市の國際歲市に就いて」（田中秀作）商業都市の發達研究に於ける歲市の重要性、萊市歲市の起源及び發達、經

路並びに其地理的要因を說き、現況を詳細に論述してゐる。「琅玕考」（新村出博士）琅玕に對する支那古來の諸說、語原的解釋、琅玕材の色及び其用途、並びに歐米の東洋學者が琅玕に下せる諸種の譯語に就いて考證したもの。「港市としての坂本」（中村直勝）瀨戸內海、淀川、琵琶湖を結ぶ水系の我國文化發達上に及ぼせる重大なる意義と坂本との關係、平安末期・鎌倉初期の關所の設定に伴ふ關錢の徵收と之を避ける方便として坂本港の繁榮、延曆寺と坂本との關係、信長の出現に依り坂本は港市より城下町へ進展せんとしたこと等に就いて論じてゐる。「陽明詩」（高瀨武次郎博士）王陽明の詩の解釋「賈魏公年譜」（內藤虎次郎博士）賈魏公の年譜を作製したもの。「ペトルス・アピアヌスの『コスモグラフィア』最初の諸版について」（小野鐵二）ペトルス・アピアヌスの略傳と學問上の位置、著書「イサーゴーゲ」「デエクラーティオ」の說明ランツフート版の「コスモグラフィア」初版（一五二四年）に關する地名、地圖等の詳細なる記載、右の異本三種、次いで出版された諸種のアントワープ版其他に就いての比較考證である。「九州地方聚落の人口地理的考察」（石橋五郎博士）行政區別的觀察、自然環境の影響、人文事象との對應に就いて論じ、過去に於ては此地方は人文的影響が聚落の人口構成上に重大であつたが、今日では寧ろ自然的影響に因り其多少が決定さるこを幾多の例を引き說明してゐる。

以上二十六篇、限られたる紙面、吾人の淺學菲才、以て充分なる紹介を試みるこの出來ぬは甚だ遺憾とする所であるが、何れも斯界の權威が小川博士の德業を慕ひ寄せられたる金玉の名篇、本書の刊行は學界を益すること頗る甚大なるを確信し、敢て世の學徒、讀書子に薦むる所以のものである。（京都弘文堂發行、價拾圓）〔太田〕

◉滿鮮地理歷史研究報告第十二

大正十五年九月第十一冊を出してより以來久しく刊行を見なかつたが今度更に第十二冊に接するを得た。收むる所四篇、其一「曹魏の東方經略」（池內宏氏）は幽州刺史毋丘儉の名に依つて名高い魏の高句麗征伐の經過と其征